



大学附属病院

助教 **大串 幹**さん

Ohgushi Miki

●プロフィール

- 1986年 佐賀医科大学卒業後、熊本大学医学部附属病院整形外科で研修医に。その後、同大学院医学研究科にて単位取得。
- 1993年 同大医学部附属病院リハビリテーション部勤務。
日本整形外科学会専門医、リハビリテーション科専門医、医学博士の学位も取得。
- 2008年 熊本大学附属病院リハビリテーション部助教

「苦勞は買ってでもしろ」って、本当かも知れない。

医者として心も体も見てみたい

父親も医師だったという大串さん。何よりもご本人が幼い時から身体が弱かったため、お医者さんとはとても近い関係だったそうです。いつもお世話になっていたことから「恩返しがしたい」という気持ちを持つようになります。そんなわけで、ずいぶん小さい頃から「お医者さんになりたい」と思っていたそうです。

学部生時代には、何を専門にするかを迷いに迷ったそうですが、「患者さんが求めるものを本当に提供できるのはどこだろう？」と考えるうちに、リハビリテーション専門医にいきついたのだそうです。「どうせ医者になるのなら、人の心も身体も全体を見たい」と、大串さんは考えます。そして、リハビリテーション科のない熊本大学附属病院でリハビリテーション専門医になるためにはどこで勉強したらいいのかを相談し、整形外科の研修医になります。熊本大学医学部大学院生時代から週一回はリハ部に通い臨床経験を積んでいったそうです。



室内用和式移動装置
「楽のり君」
後方の装置と接続することで
座ったまま移動が可能。

人は失敗から学び、そこから育つ

院生時代から、上司からは厳しく鍛えられたという大串さん。結婚をし、小さいお子さんを抱えながら、仕事をやる。泣いたことも挫けそうになったことも何度もあるそうです。三年半前に亡くなられた大串さんの夫は、そんな大串さんの「精神的な部分でのサポートをし続けてくれました」。大串さんが挫けそうになると、夫は「負けるんじゃない、大丈夫、あなただったら出来る」と、発破を掛け続けてくれました。

辛いこともありました。今思えば「鍛えてもらって、本当に良かった」と思うそうです。なぜなら、今では「楽しんで良い目には合わない」と実感するからです。つまずいたり失敗したりといった経験からしか学び取れないことが、世の中にはたくさんあります。人は失敗から学び、そしてそこから育っていくのでしょうか。

現在では三人のお子さんから励まされているとおっしゃる大串さん。家族の絆を、とても大切にしていらっしゃいます。

研究は自分発見の旅

若い人たちには「是非、研究の道に入ってきて欲しい」と、大串さん。行き詰まったらテーマを替えてもいいのだから、とにかく研究を継続していくこと。「何年掛かったっていいんです。時間を掛けてやればいい。そこには様々な出会いが待っていますから。研究だけでなく、得るものがたくさんあります。キャリアアップのためでもいいし」。そして、論文を書くということは「自分だけの発見をする」ということなのだから、エキサイティングだし、とても面白いとおっしゃいます。

また、やりがいのあるリハ専門医の仕事についても「リハビリのテクニックだけの問題ではないんですよ。大学病院という特性から、命に関わるような状況で運ばれてくる患者さんがほとんどです。急に動けなくなった患者さんは、心神喪失状態になります。今まで出来ていたことが出来ないわけですから。そういった患者さんが自分自身を理解していく過程を、リハ医は心身の両方からサポートしていく必要があるのです」。大学にリハビリテーション医学を学ぶ講座が出来て、リハ医が増えてくれることを願う大串さんです。